

タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト

ブッサバー・バンチョンマニー、今枝亜紀、ブラパー・セーントーンスック

1. はじめに

タイでは、中等教育機関における日本語教育の普及に伴いタイの学習者に合った教科書を求める声が高まり、2000年に中等教育用日本語教科書作成プロジェクトが発足した。

本稿は、このプロジェクトの概要と、その成果物である日本語教科書『あきこと友だち』の特徴や2005年3月までの使用状況等を報告するとともに、この教科書プロジェクトについて考察することを目的とする。

2. 教科書作成プロジェクトの概要

2.1 プロジェクトの背景 -タイの中等教育における日本語教育-

タイにおける日本語教育は1947年にボピットピムック後期中等教育日本語講座から始まった。その後、中等教育機関では1981年に高校の正規科目として認定されて以来、開講校は増加を続けている。1998年に大学入試の選択科目として採用されてから、日本語学習熱はますます高くなり、国際交流基金バンコク日本語センター2003年の調査によると、231の高校で開講し、タイ人・日本人の専任・非常勤合わせての教師数は305名というところまでに発展した。この量的発展はタイ教育省の方針によるものでもあり、それを支えるものとして教育省と国際交流基金によって行なわれていた「中等学校現職教員日本語教師新規養成講座（通称：新規研修）」の存在を忘れることはできない。（新規研修の詳細については、国際交流基金HP「世界の日本語教育の現場から」（2004年度）等を参照のこと）

従来の教育省カリキュラムでは、中等教育機関での日本語教育は高校1年から始まり、週あたり授業数6コマ、3コマ、1コマ等様々な形式があった。教材は日本で作成出版されたものか、タイ国内で出版された教科書でも一般成人向けのものばかりで、高校生のために開発された教科書はないという状態であった。高校の日本語教育が開講校、教師、学習者とも量的に充実してくるのに従い、タイの高校生の学習目的、地域性、世代等を考慮した教科書を求める声が現場から聞こえてくるようになった。また、高校の日本語教師の中には前述の新規研修によって日本語教師になった、日本語学習歴、日本語教授歴ともに比較的浅い者が多いにもかかわらず、日本語だけでなく、もともとの担当科目も教え、ほかの学校業務もこなさなければならないという状況に置かれているため、教材研究や授業準備の負担を最小限におさえた、教師にとっても使いやすい教科書が必要とされていた。

このような状況のもと、タイ教育省と国際交流基金との協力によって高校用の日本語教科書を

作成するプロジェクトが始められた。1999年6月には国際交流基金日本語国際センターの専任講師2名がタイを訪れ、各地の関係機関を訪問する等して事前調査を行なっている。同年度中にプロジェクトの原案を策定、2000年2月に執筆委員会が組織され、2000年度より原稿作成を開始した。

また、この数年タイの学校教育には大きな変化が見られるが、その中で最も大きな変化はカリキュラムの改訂である。タイ教育省はそれまでのカリキュラムを大幅に改訂し、学習者中心の教授法を重視した『仏暦2544年（西暦2001年）基礎教育カリキュラム』を施行した。日本語教科書『あきこと友だち』のコミュニケーション中心の考え方はタイ教育省が発表したガイドラインに沿ったものであり、プロジェクト開始後に施行された新カリキュラムの考え方にも対応した内容となっている。それまでは使用教科書を決めれば後はその教科書に沿って授業を進めるだけでもよかったが、このカリキュラムでは教師のより積極的な授業運営が求められている。外国語の授業には、コミュニケーションのための言語、言語と文化、言語とほかの科目との関連、言語と地域社会や世界との関連、という四つの要素を取り入れ、各クラスにあわせて教師自身が教材を用意して授業計画案を立て公開しなければならないとのことである。

2.2 作成体制

教科書の作成はタイ人の高校日本語教員6名、大学日本語教員4名、国際交流基金バンコク日本語センター専任講師1名と、日本人の派遣専門家1名からなる執筆委員会によって行なわれた。高校教員の現場に関する知識や経験と、大学教員の日本語、日本語教育に関する専門性を生かし両者の共同作業によって教科書作成を進めたことはこのプロジェクトの特徴の一つである。このほかに、国際交流基金日本語国際センター専任講師1名とバンコク日本語センター主任講師1名がアドバイザーとして、聖心女子大学の佐久間勝彦教授が監修者として加わった。

2000年度から作業を始め、1学期毎（前期・後期の2学期制）に1分冊、2003年度前半までで3年間分6分冊の試用版セットを作成した。試用版は2001年度から順次高校で試用し、その結果を反映させて修正を加え、市販版を完成させた。市販版の販売は日系の民間業者を通して行なうこととなり、2004年3月に第1、3、5分冊の市販を開始した。第2、4、6分冊の出版は2004年10月であった。2005年3月時点でこの教科書を使用している学校数は約120校、第1分冊の販売された冊数は約6,300冊、第2分冊の販売された冊数は約3,500冊である。

2.3 作業の流れ

執筆委員会では作業の流れとして以下の段取りをとった。計画立案、アンケート調査、シラバス作成、課ごとのブレインストーミング、執筆、原稿検討、編集合宿、試用、修正、市販である。

2.3.1 アンケート調査とシラバス作成

シラバス策定にあたり学習者及び教師がどのような形式、シラバス、内容の教科書を求めているかを把握するために全国の高校（6コマ校）の学習者と教師を対象にアンケート調査を行なっ

た。

表1 現在使用している教科書の感想（教師 48 名）

	多すぎる	適切	少なすぎる	全く無い
会話	2 名	16 名	23 名	5 名
タイ語による文法説明	1 名	12 名	8 名	23 名
挿絵	－	11 名	37 名	1 名
練習	2 名	26 名	16 名	2 名
活動	－	－	12 名	37 名
漢字	7 名	30 名	5 名	2 名
語彙	6 名	33 名	6 名	－
文法項目の量	16 名	25 名	4 名	－
文化の情報	－	7 名	37 名	5 名

表2 現在使用している教科書の問題点（教師 48 名）

学習者に適していない	33 名
現代的ではない	27 名
タイ語の教師用指導書がない	25 名
売っている場所が少ない	24 名
実用的ではない	21 名
音声テープがない	12 名

表1、表2をまとめると、アンケート実施時に使用していた教科書は「会話」「タイ語による文法説明」「挿絵」「活動」「文化の情報」について「少なすぎる」か「全く無い」で、「漢字」「語彙」「文法項目の量」は「適切」であるが、「学習者に適していない」という意見がうかがえる。

表3 学習者が感じる問題点（学習者 200 名）

聴解	134 名
漢字	128 名
文法	125 名
語彙	97 名
会話	88 名
作文	81 名

読解	67 名
文化	59 名

表 3 からは、タイの学習者が難しいと感じている技能はやはり「聴解」だということがわかった。このことは教科書原稿に反映させ、各課に聴解練習を設けた。

表 4 どんな教科書がほしいか（教師 48 名）

ゲーム・歌などがある	45 名
コミュニケーションを中心にしている	44 名
文化についての情報がある	44 名
タイ語で書かれた教師用指導書がある	42 名
音声テープがある	42 名
ビデオがある	42 名
挿絵に色がついている	42 名
タイ語で書かれた文法説明がある	41 名
ワークブックがある	37 名
各課ごとに読解の練習がある	36 名
語彙のタイ語訳がある	33 名
CAI 教材がある	23 名

表 5 どんな教科書がほしいか（学習者 200 名）

文化についての情報がある	156 名
コミュニケーションを中心にしている	153 名
語彙のタイ語訳がある	151 名
ビデオがある	149 名
タイ語で書かれた文法説明がある	139 名
ゲーム・歌などがある	133 名
音声テープがある	131 名
読解の練習がある	124 名
挿絵に色がついている	117 名
ワークブックがある	113 名

表4、表5に見られる希望のうち、ビデオ、CAI教材、カラーの挿絵は今回のプロジェクトでは実現できず将来への課題として残された。その他の内容面は考慮して教科書計画に取り入れた。

このアンケート調査で得られた情報を考慮し、以下の方針でシラバスを策定した。

- ・ コミュニカティブ・アプローチを取り入れ、コミュニケーションを重視した教室活動用の教科書とする。
- ・ 学習者にとって身近な話題を取りあげる。
- ・ 本冊に読解練習、聴解練習、活動等を多く取り入れる。
- ・ 学習者のニーズ（大学入試への対応等）に合わせて、文法等の到達目標を日本語能力試験出題基準の3級程度に設定する。
- ・ 学習時間週6コマで3年間使用する。

2.3.2 原稿の作成

作成にあたっては原稿執筆の前に、全員で各課毎のブレインストーミングを行ない、課の学習目標にあわせて扱う文法項目の範囲、文法説明の内容、会話の場面設定、練習の流れ、提出する語彙等を検討して共通理解をはかった。

原稿は会話、練習、文法等、項目毎に主に大学教員等が分担して執筆した。教師用指導書の執筆は本冊の原稿がほぼ揃った段階で高校教員が分担して行なった。現場での教授経験を生かし、高校教員の視点から書かれているところが特徴である。また、教師用指導書の執筆が同時に教材研究、教授法の研修の場ともなり、執筆委員がお互いの教授法を共有することができた。

会議では分担して準備した原稿を持ち寄り、実際に練習を行なってみたり会話を演じてみたりして内容や難易度がふさわしくできているかどうか確かめながら原稿検討を進めた。コミュニケーション中心の教室活動を目指した教科書作りと文法教育とのバランスに関しては、能力試験や大学入試との兼ね合いから、扱う文法項目の取捨選択について何度も議論を重ねた。会議回数は2000年度から2003年度までの4年間で約120回にのぼった。また各分冊の編集作業のため半年に1度の学期休みに合宿会議を行なった。合宿という集中した時間を持つことで教科書全体のバランスをはかることができ、項目毎の原稿検討を行なう通常の会議とは異なる効果があった。

2.3.3 試用と修正

試用版は教育省が試用校として任命した公立高校5校で試用した。その結果を市販版作成の原稿修正作業に反映させるため、教師、学習者双方に対するアンケート、インタビュー及び授業見学等を行なった。試用開始の2001年3月には試用校を対象とした試用オリエンテーションを、試用開始1年後の2002年5月には試用校連絡会議を行なった。教科書の内容に関しては特に日本の社会や文化に関する記述がある点や練習の種類の豊富さ等について好意的な反応が見られたが、本の大きさや挿絵等、見やすさ、使いやすさに関して改善を求める意見もあり参考になった。

公式の試用校5校のほかにも、授業に使ってみたいという高校には試用版を配付した。希望校

は 2003 年度に入ってから少しずつ増え続け、最終的に当時全国で日本語を開講していた高校の半数以上に当たる約 100 校強に配付した。もともとは 6 コマ用に計画された教科書であるが 3 コマ校等でも使われた。試用校 5 校以外には試用結果のフィードバックは課していなかったが、感想や意見が自主的に寄せられ関心の高さを感じた。

市販版作成のための原稿修正作業はこの試用結果も参考にして 2003 年度に集中的に行なった。一番大きな変更は、あいさつ・日常表現とひらがな・かたかなを扱う第 1 課の構成を見直したことである。その他、会話形式の練習では、長い文や発音の難しい単語は学習者にとって発話しやすいものに改めて表現の練習に集中できるようにした。また 6 分冊全体のバランスを見て文法、語彙、漢字の提出順序の入れ替えや追加をしたり、説明や指示の不十分な部分を補ったりした。大幅な原稿変更は一定期間の使用を経た後の将来の改訂に譲ることとして、ここでは必要最小限の修正を行なうにとどめた。

3. 教科書 「あきこと友だち」

3.1 教科書の構成

教科書は本冊、ワークブック、教師用指導書、音声テープ、計 4 点のセットで、ワークブック以外は前期、後期に各 1 分冊ずつ 3 学年分で計 6 分冊、ワークブックは 1 年に 1 分冊ずつの計 3 分冊になっている。

3.1.1 本冊

本冊は序章の日本語概略に続き、第 1 課ではあいさつ・日常表現とひらがな・かたかなを扱う。第 2 課から第 30 課までは「学習目標」「キーセンテンス」「会話」「練習」「文法説明」「語彙リスト」「漢字」「ミニ情報（文化紹介）」で構成されている。

・「学習目標」「キーセンテンス」

課の冒頭に「学習目標」として、その課の学習が終わったら日本語で何ができるようになるかを示す。「キーセンテンス」は学習目標に到達するためにその課で扱う文法項目の例文を挙げる。

・「会話」

全課を通じて登場人物は日本人留学生の高田あきこ、ホストファミリーの両親と高校生のナッター、高校の友人達等である。あきこは日本についての情報を伝え、ナッター達はタイについての情報を提供するという役割を持つ。学校やホストファミリーとの交流場面で、高校生に身近な話題を取りあげる。

・「練習」

練習には基本的な練習と応用の練習がある。基本練習は語彙や文型が正しく使えるようになるための練習である。授業での使用を想定し、ペアやグループで楽しみながら学習できるようにビンゴやすごろく等ゲーム形式の練習を多く取り入れている。

応用練習は基本練習で練習した事柄が定着した後に用いる。コミュニケーションのある活動を

重視し、ミニ会話形式のものが多く、質問と答えの一往復で終わるのではなく、切り出し表現を加えたり応答の後にもう一言を添えたりしている。場面を設定し、単に教科書に出ているキューを置き換えるだけではなく、学習者が自由に内容を考えて発話する練習もある。例えば、勧誘表現の練習では誘われた者がその誘いを受ける返答をするか断る返答をするかは学習者の判断に任せている。全ての課に読解練習と聴解練習も設けた。

・「文法説明」

文型の意味のみならず、それが使用される場面や状況に関する情報も盛り込んでいる。例えば「Vてください」の例文には日本語の例文とそのタイ語の訳文だけではなく、「先生が生徒に教科書の40ページを開けるように指示する」という状況についての説明もつけている。

・「漢字」

各課の話題にあわせて平均10字の新出漢字を提出した。漢字のページには画数、筆順、意味、音訓、その字を使った語彙を載せた。日本語能力試験3級出題基準の漢字はほぼカバーしている。

・「語彙」

各課にその課の新出語彙のリストを設け、タイ語訳を示した。適当な訳語がない場合はタイ語で語義の説明をした。また各巻末にその分冊までの新出語彙索引をつけた。

・「ミニ情報」

事前アンケートに見られた文化についての項目を入れてほしいという要望を取り入れたもので、日本の社会や高校生についての情報を扱う。日本についての情報を得た後でタイについて振り返り比較して考えるためのタスクも設けた。

3.1.2 ワークブック

本冊の練習は授業での口頭練習に使うものが中心で、話す・聞くが主であるが、ワークブックの練習は主に文法項目の定着のために書いて文字で確認する練習として作成した。

3.1.3 教師用指導書

タイで出版された教科書の中で教師用指導書があるものは他にない。本冊の使い方、導入や練習の手順、追加の教室活動等を紹介している。教師のための追加情報もある。例えば「は」と「が」の「主題」と「主語」の概念の違い、また「Nにします」と「Nを食べます」の違いについての説明等で、教師自身の日本語運用能力向上のために設けた。その他、聴解練習のスクリプト、ワークブックの模範解答も載せている。

3.1.4 音声テープ

本冊の会話、練習の例文、読解、聴解、新出語彙を収録した。学習者の自習用よりも教室での使用を主な使用目的として作成した。初級教科書の付属テープは普通の日本人が話す速さよりもゆっくりめのものが多いが、あえて初級段階から日本人の普通の発話速度に馴れるように、できるだけ自然な速さで発話したものを録音した。この教科書を使用した学習者の聴解能力の向上も

報告されており、各課に聴解練習を設けたことと、自然な発話の速さで録音をしたことによる効果ではないかと思われる。出演はバンコク在住の日本人日本語教師に依頼し、会話の登場人物は全分冊を通して同じ出演者が担当するようにした。

3.2 教科書の特徴

各課の内容は、先ず学習目標を決め、その達成に必要な文法項目、語彙、ふさわしい会話の内容等を振りあてて構成した。例えば第2課の学習目標は「自己紹介ができるようになる」「他の人を紹介することができるようになる」で、文型は名詞文「Nです」等、語彙は職業・国籍・学年を表す名詞、会話の場面設定は留学生の歓迎パーティである。第3課の場所の案内の課では「あります・います」の文型を扱い、会話はタイ人の高校生が日本人の留学生に学校の中を案内する場面とした。第12課は道順の説明の仕方を学習する課であるため、出発点、目的地・終点、通過点を示す助詞や、「V1て、V2」等の文法項目、語彙は乗り物の乗降に関連するものを導入する。会話は友人の家への道順の説明等である。

学習目標に合わせて文型を選んでいるため、一般の初級教科書とは文型の提出順序や扱う範囲が異なるところがある。例えば、第3課の「あります・います」では、疑問文の「だれがいますか」「何がいますか」「何がありますか」を導入するが、一般の初級教科書では「だれかいますか」「何かいますか」「何かありますか」という形を使って「疑問詞＋か」の用法も同じ課で扱う場合が多いだろう。しかしこの教科書ではこれを別の第8課で導入している。第3課の学習目標は「場所の案内ができるようになる」であるため、この課の場面設定で自然に出てくるのは「何がありますか」「電話もありますか」ぐらいであり、「何かありますか」はおそらく出てこないだろうからである。第8課「やすみの日(1)」の誘いの場面で「どこかへ旅行に行きませんか」という表現で導入し、過去に行なった活動やその感想を言う第9課「やすみの日(2)」で「れんきゅうにどこかへ行きましたか」「いいえ、どこへも行きませんでした」のような文を出すほうがこの項目を導入するのにより適切であると考えた。

学習者にとって難しい項目は一つの課で一度に導入するのではなく、学習目標に合わせていくつかの課に分散させた。例えば条件表現は、第19課のパーティの準備について助言を求めたり助言を与えたりする場面で「Vたらいい」を導入し、「パーティのためにおり紙でいろいろな物を作りたいんですが……」「おり紙なら、いい本がありますよ」のように相手の言った言葉を取りあげてそれを話題にする場面で「Nなら」を提出した。「たら」は再び、基本的な用法を第22課「待ち合わせ」の「(店が) いっぱいだったら、ナッターさんにほかの店を教えてください」という場面で導入する。条件表現はこの他に、第25課「しょうらい」で「Vなら」「がいこうかんになりたいなら、いろいろな外国語を勉強したほうがいいですね」を、第26課「きかいの説明」で「と」「このボタンをおすと、車が小さくなります」を、第27課「たいへんな一日」で「Vばよかった」「バスかタクシーで来ればよかったです」を取りあげている。このように、一つの文法項目の複

数の文型や一つの文型の複数の機能を一度に提出するのではなく、課の学習目標にあわせて何回かに分けて導入し、少しずつ定着させるようにしている。

実際に試用版を使って授業を行なった高校教員の感想には以下のようなものがある。それまで使っていた教科書との比較で、この教科書の特徴が表れている。

- ・この教科書の長所は学習者に文型練習をさせるだけでなく、実際にどのような状況でその文型を使うのかについての説明もあるという点である。かつ、練習もその状況を想定して行なうので、結果としてこの教科書を使った学年の学習者はこれまでの学習者よりも会話能力が高いという印象がある。

- ・内容が四技能をすべてカバーしているので、教師が忙しい合間をぬって補助教材を探す手間が省ける。

- ・面白い教室活動が盛り込まれているので、授業が楽しい。

- ・高校生である学習者の身近な話題を取りあげているので、わかりやすく、実用的である。インターネット、eメール、携帯電話等、現在使用されている言葉、最近の時事も盛り込まれている。

- ・伝聞の表現では「ーと言いました」という文型だけではなく、「ーと言っていました」のように実際の会話で使用される表現も導入している。

- ・グループワークやペアワーク等、学習者同士で行なう活動が多く取り入れられているため、練習中に、よく理解している学習者がまだあまりよく理解していない学習者に教えることができ、助け合い精神を培うとともに、能力があまり高くない学習者も授業の内容についていくことができる。

- ・従来の教科書と比べて置き換え練習が少なく、他のテキストから補わなければならない。

今後、市販版についても追跡調査を続けてこの教科書の評価の材料とすると共に、将来の改訂の参考資料としたい。

4. 教科書作成プロジェクトについての考察

4.1 執筆委員によるプロジェクトの感想

執筆委員による教科書プロジェクトに対する感想をまとめると以下のようなものがある。長期に渡るプロジェクトで負担も大きかったことと思われるが、教科書を完成させただけでなく、プロジェクト参加の経験が日本語教員としての専門性の向上にもつながっていた様子が伺える。

- ・中等教育機関における日本語教育の充実

この教科書はタイ教育省のガイドラインに沿って作成され、新カリキュラムにも対応している。新カリキュラムでは教育に対する考え方が伝統的な教師中心から学習者中心へと変わったほか、外国語教育においてはコミュニケーション重視の方針がはっきりと打ち出されている。この教科書を使うことによってその理念が実践され、タイの中等教育機関における日本語教育が一層充実

することを期待している。

- ・研修効果

執筆委員会では執筆作業中、不明な点については納得するまで全員で検討し、白熱した議論が交わされることが度々あった。これは執筆委員にとってよい勉強の機会でもあり、その成果は教科書にあらわれているだけでなく、各執筆委員の日常の教授活動にも反映されている。

- ・ネットワーク形成

このプロジェクトでの活動は、これまであまりなかった高校の教員と大学の教員が日本語教育について意見を交換する場を提供してくれる役割も果たしていた。今後もこのつながりが消えることなく続くと共に、この輪がひろがっていくことを期待している。

- ・教材作成の視点

以前は授業準備や教材作成のとき文型や練習形式等、形にばかり注目していたが、教科書プロジェクトでの経験を経て、違った視点から見るができるようになった。知っていることを何でも入れるのではなく、各々の目的を考えるようになった。例えばこの文型を学習するのは何ができるようになるためかとか、そのためにはどのような練習方法が有効か、この練習は何のためにする練習か等ということである。また作業の進め方としては、いきなり作り始めるのではなく、まず計画を立ててそれを実行し、更にその結果を見ながら次へ進むという方法を学んだ。

4.2 今後の課題

この教科書は作成中からの試用を経て 2004 年度の市販開始に至った。試用期間を持つことによって教育現場からのフィードバックを取り入れることができ、新しい教科書の宣伝効果もあった。2004 年 3 月には発売を記念して国際交流基金バンコク日本語センターで教科書セミナーを開催し、教科書の紹介と各項目の使い方の簡単な説明を行なったが、従来の教授法や教科書が文法教育中心であったため、学習者中心やコミュニケーション重視というこの教科書の特徴を生かした使い方や新カリキュラムに合った教授法の勉強会、研修会等を今後も継続的に行なっていく必要があると痛感している。前項 4.1 に見られる教科書プロジェクト参加による執筆委員への効果が、執筆委員個人の日本語教授活動の向上にとどまるだけでなく、教師間のネットワークを通じて共有されていくことが期待される。

教科書自体に関しては、使用状況を調査したり、多くの使用者の意見を取り入れる等して将来の改訂作業に臨む必要がある。また、教授活動の手助けとして、この教科書の学習方法にあった評価法（試験問題）や副教材の開発等、様々な作業が残されている。教科書作成プロジェクトは市販版の完成をもって終了し執筆委員会は解散したが、執筆委員会の枠にとらわれず、この教科書とプロジェクトを通して得られた経験がタイの日本語教育界の活性化に役立っていくことを願っている。

参考文献

国際交流基金日本語国際センター「世界の日本語教育の現場から《タイ》」

<http://www.jpfi.go.jp/j/learn_j/voice_j/tounan_asia/thailand/2003/report06.html>

2004年9月1日参照

プラニー・チョンスッチャリットタム (2004)「タイ国後期中等教育のための日本語シラバス」、『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』7号、71-82、国際交流基金日本語国際センター
森下稔、鈴木康郎、カンピラパーブ・スネート (2003)「仏暦 2544 (西暦 2001) 年基礎教育カリキュラム (翻訳)」、『中等学校の多様化・個性化政策に関する国際比較研究』平成 13-15 年度科学研究費補助金 (基盤研究(A)(1)) 中間報告書 課題番号: 13301014

(以下は使用言語: タイ語)

プラパー・セーントーンスック、今枝亜紀、前田綱紀 (2001)「後期中等教育日本語教科書に関するアンケート結果」、『バンコック日本語センター紀要』4号、国際交流基金バンコック日本語センター

プラパー・セーントーンスック、今枝亜紀 (2003)「タイ国中等教育用日本語教科書 (試用版) の作成」、『バンコック日本語センター紀要』6号、国際交流基金バンコック日本語センター

